

大学応援団という空間とその身体（原文）

著書：「近代日本の身体表象」

著者：瀬戸那弘（早稲田大学スポーツ科学研究センター研究員）

杉山千鶴（早稲田大学スポーツ科学学術院教授）

初版：2013 年 10 月 3 日



☆はじめに

本章においては、大学における応援団に注目し、日本の学生スポーツを支えてきた彼らの活動を通して、生成し護られてきた学生身体文化について考察する。現在、応援団は、時に「時代錯誤」とも揶揄される、行動様式を堅持しながら活動する傾向がみられるが、一方でそれらの行動様式は、現在ではすでに失われたスポーツ黎明期文化の残存とも考えられる興味深いものともいえる。本章では応援団という空間とそれを構成する身体に注目し、日本独自の身体文化として応援団の研究を試みるものとなる。

ここでは特に東京六大学（以下、六大学）応援団を、中心的関心事として大学応援団のリーダー部の動態に注目する。東京六大学応援団は日本の応援団文化の礎を形成したといわれ、常にその中心に位置し、応援団文化の形成に、大きな影響を与えてきた存在といえる。

いわゆる「学ラン」姿のリーダー部を中心とする応援団は、当時のバンカラ文化とも呼応し、学生独自の文化形成の一翼を担っていたと考えられる。ところで明治期に始まる学生応援団は、第二次世界大戦に、戦況悪化の中、多くが解散することとなるが、戦後再興を遂げ、一九七〇年代前半（昭和 45 年頃）には「応援団ブーム」なる中興時期を経験することになった。その後そこを頂点に応援団数は（休止を含めて）減少の一途を辿ることになるが、一方で現在でも学生スポーツになくはない存在としても、評価を受け続けるところでもある。

本章ではその途次に応援団活動とその集団が保持してきた、慣習や約束の総体をひとつの「日本文化」として捉え、戦後の復興期から応援団ブーム頃までに、蓄積された史料や言説を基に彼らの求め育んできた世界を考察することにする。

1. 学校体育に求められた身体と大学運動部で育まれた身体

明治期を迎えた日本において、近代国家への歩みの中、学校空間における身体教育が焦眉のテーマとして存在していたことは周知の事実であろう。国家のイデオロギー装置であった学校では、近代国家における理想的・画一的な身体の構築が標榜された教育制度の下、国家を支える身体の養成の場として、その役割を担っていたのである。そこでは個人の体力強化と、集団行動への理解と定着が求められることになり、城丸章夫が「儀礼式動作」とも呼称する、「隊列運動」や「兵式体操」などの導入が図られ、体育は近代国家建設に見合う身体の養成空間だったのである。その後、大正期には陸軍現役将校が学校に配属され、身体教育に軍隊が直接関わるようになり、戦時体制下に移行する中、体育はより直接的な軍事教練の場となっていくようになった。

ところで、場を同じく運動（スポーツ）を行う社会集団である運動部においても、その成立や発展に上記社会状況が影響していくことになる。木下秀明が指摘するように、運動部も「擬

制軍隊」としての役割を求められていくことになり、教育政策の「直接的」なプロセスは取り込まれないまでも、運動部は必然的に国家政策を支える身体形成に一役買うことになっていったのである。

その一方で、運動部は我が国の歴史上もうひとつの重要な機能を担っていたともいえる。それは、外来文化としてのスポーツの受け皿としての役割を担った点である。そもそも外来文化を受容する際に我々は既得の概念下、もしくはその概念の延長線上に、それらを存在するものと仮定して認識することになるが、研究者はこれを「対訳的適応」と称する。つまり自文化の認識の範囲内にある概念と、新たな文化が重ね合わせられることにより、はじめて未知の概念の理解が可能となるのである。そう考えると、他文化をそのままの形で受容すること自体が、不可能であるといえ、文化とは必然的に変容しながら伝播するものといえよう。当然のことながら外来文化スポーツが、日本へ導入された際にも、当該文化文脈で認識し直され、漸次その意味世界が変容されながら受容されることになった。その結果、外来文化スポーツは、ひとつの新たな日本の身体・運動文化として生成・定着することになったのである。ベースボールやラグビーなどアメリカ、イギリスからもたらされたスポーツは、第一大学区第一番中学校（翌年、開成学校へ改称）や、慶応義塾大学など学校空間を介して、日本社会に紹介されていくことになったが、そのため運動部はこの過程において、新たな文化の醸成・発信基地の役目を担うことになったともいえるのである。

たとえば野球でいえば、坂上康博が「武士的野球論」と指摘するように、その受容過程において、発祥地アメリカで共有される姿から脱構築がなされ、日本では「精神修養」をその中心的価値とし発展していくことになる。つまり、ベースボールは「野球」と翻訳されるが、その過程においてすでにベースボールとは異なるものへと変質しており、新たな身体・運動文化「野球」として再創造されたものともいえよう。したがって、明治期に多く創設された運動部は、日本人を富国強兵の求められる身体へ移行させる場として、その一方で当時の最新の外来文化であるスポーツを受容し、新たな文化に再編して発信する場として機能していたのである。

ところで、敗戦を境に我が国では、国家が標榜していた旧来の思想が否定され、日本社会は至るところで大きな変容を求められることになった。多くの価値観が否定され消失していく中、学校教育もその例に漏れなかった。体育においてもそれまでの軍事的な色合いは一掃され、新たな身体教育が標榜されることになったのはいうまでもない。ところが、その一方で運動部は、敗戦後の変革の強風が吹き荒れる中においても、国家軍事政策の直下になかったこともあり、結果的にそれまでの在り方を継承しやすい状況にあったと考えられる。また同時に学徒動員を経て復員した学生たちが主体となり、再構築・形成されていく状況にも重なり、戦後体育会運動部の根底には、少なからず戦前の思想的な価値観が残存することにもなっていた。そこでは、我々が現在“伝統的クラブ観”と理解する思想が生成されることになったのである。つまり、運動部は「戦前の日本人とその思想」が生き残りやすい空間として存続したともいえる。そのため戦後のリベラルな思想の中、スポーツがスポーツ科学の下、効率や合理性を追求しながら発展・変容していくときに、いわゆる「伝統校」といわれる戦前からの系譜を持つ体育会運動部においては「心身鍛錬」や「精神修養」という心のあり方に重きが置かれ、独自の世界観を形成・再生産してゆくことになっていったのである。そのため現在でも、伝統

校の運動部空間では、国際スポーツを実践しながらもそのバックグラウンドおよび、真の目的として精神修養が位置し、いわゆる伝統的なクラブ観が継承され、展開されるのである。現在、競技スポーツは勝利を求める空間として存在し、そこでは勝利への効率や合理性の確保が最も重要な関心事となる。たとえばサッカーＪリーグなど、プロスポーツクラブの動態に注目すればそれはわかりやすいだろう。一方で、同じ競技を行う伝統校の運動部ではこのような背景を有するために、彼らの求める勝利の質が異なっていることが指摘できるのである。当該集団では試合における「勝利」を求めながらも、集団の持つ伝統、つまり共有される価値体系を護ることが重要な前提となる。これを維持しながら、なおかつ試合に勝つことが彼らにとって「真の勝利」ということになる。したがって彼らは集団のいわゆる「伝統」の保護をまず最優先するために、時に時代に合わない合理性を欠くともいわれる、決まりごとなどを踏襲する場合があるといえる。

2. 大学応援団の歴史と役割

スペクテータースポーツ（観戦スポーツ）において、熱心な集合的応援がその重要な空間構成要素であることは、高橋豪仁によってすでに指摘されているが、同空間では興奮に乗じた観客同士の衝突も散見され、それらは大きな社会問題となることもしばしばである。たとえば一九〇六（明治三九）年、野球の早慶戦において、両校学生の熱狂も凄まじく、双方の挑発行為が繰り返され、ついには早慶戦自体が中止となってしまったことは有名である。また、その影響は試合の実施に留まらず、その後一九年間にわたり私学の雄たる両大学間のあらゆる交流が途絶えることにさえなったのである。同様に野球で、一八九〇（明治二三）年の第一高等学校と明治学院戦で起きた「インブリー事件」、一九三一（昭和六）年春に慶応義塾大学対明治大学戦で起きた「八十川“ボーク”事件」や、一九三三（昭和八）年に早稲田大学対慶応義塾大学戦で起きた「水原リンゴ事件」など、スポーツへの一般の人々の関心の高まりから、社会全体へも大きな影響を与える事件が起きるようになったのである。

このように集団での応援行為とはスポーツの周知的な一要素に留まらず、その空間はもとより、その母集団や当該社会全体にも大きな影響を及ぼす可能性を持つものになっていった。そのため、秩序だった応援空間を形成・維持することはスペクテータースポーツのひとつの「前提」ともいえ、組織的団体応援の必要性が、日本の応援団の誕生を後押ししたと思われる。

ところで、応援団黎明期は応援の秩序のみならず、先述のように競技場の「治安」が不安定であり、彼らはここでもその役割を求められることになる。たとえば「野球場には応援席でピストルをぶっ放なすような物騒な学生ヤクザ、学生をおどすチンピラなど……」と表現があるように、当時のスポーツ空間には興奮に乗じて秩序を乱す者、もしくはそのために集まってくる者など、安全や公序良俗を乱す輩が跋扈しており、これらを排することも応援団の重要な任務のひとつだったのである。彼らはいふなれば“学校警察”だったとも指摘されるところである。もしそうだとすると戦後の東京六大学応援団連盟の発会式において「……暴力団的存在であり、それが過去のいわゆる応援団としての性格であるとみられた傾向が多分にあったことは事実であります」と、学生応援団を表してこのような表現が使われているが、上記のような輩との対決や、その排除まで求められた彼らに多少の荒々しさが見られても仕方がなかったかもしれないと、彼らの名誉のためにも筆者は思うところである。

このような時代背景の下、日本の応援団の中心的存在であり、中学校・高等学校や社会人応援団に大きな影響を与えてきた東京六大学の応援団が誕生することになる。彼らはその後、戦時下その大半が解散し、学生応援団文化は一時途絶えてしまうことになるが、「戦後日本の復興と学園文化の再興」を目指すため、スポーツ文化の再興が求められる中、「応援団のあるべき姿を真剣に考え、親睦を図り、応援団同士のトラブルを未然に防ぎ円滑な応援を実施する」ことを基軸として、一九四七（昭和二二）年に東京六大学応援団連盟が発足することになった。その後、本連盟では明治神宮野球場で春秋に開催される東京六大学野球連盟リーグを中心に、多方面で活動を再開することになり、日本の応援文化は復活・継承されていくことになったのである。

3. 応援団の継承する象徴的世界

先述したように一般的に応援団では、時に「時代錯誤」とも揶揄される伝統的な行動様式を継承する向きがある。現在否定的にも評価されるこれらの活動であるが、見方を変えればそれは、彼らが独自の身体文化の維持・再生産のために、求めて行う営みである可能性を筆者は指摘している

ところで高橋豪仁により、応援空間には社会構造や社会規範を表出させ安定した社会価値を再生産する働きがあり、ひとつの儀礼として理解できることが指摘されているが、応援空間をひとつの文化として理解する立場の本章からすると、集合的応援行為にひとつの儀礼性が見出されたことは興味深い。高橋の指摘は「世俗的」儀礼行為であり、宗教文脈で語られるものではないが、筆者は応援団の儀礼性とは宗教的文脈、あるいは実際の宗教空間とも深く結びつき、その神聖性を醸成してきていることも指摘したい。以下に応援団の備品の扱い方を通して彼らの宗教的儀礼性に富む世界観を紹介したい。

たとえば、応援団にとり応援団旗とは単なる道具の範疇に留まるものではない。団旗とは団全体や母校の名誉と誇りを体現するいわば象徴的存在となる。団旗には専属団員（旗手）が配され、その保管や管理には数多くの約束事が設けられ注意をもって扱われることになっている。団旗は多くの場合、応援団室もしくは幹部室の最も奥に位置する。“神棚”とも想定できる場所に丁重に保管される。また、団旗は神聖にして“穢れること”が許されない存在であるために、団旗箱から出された際、特にその晴れ舞台ある団旗掲揚中は、細心の注意が払われており、決して“地につけてはならない（倒してはならない）”暗黙の了解が成立している。なぜなら不浄とも目される地面への旗の接触は、すなわち旗の穢れを意味し、全学の誇りへの不敬とされるためである。そのため、上記の事態には謹慎や退団などの厳しい責が問われることにもなった。旗手は少々オーバーに述べれば“命を懸けて”護るほどに、団旗とは神聖性を帯び、彼らの尊厳を体現する存在と理解されているのである。

ところで旗への敬意を考える場合、応援団成立の時代背景からして旧日本軍における「軍旗」の扱い方との比較は示唆に富むものと思われる。旧日本軍において軍旗とは天皇から直接授与されるものと位置付けられ、いわば“現人神の分身”ともいえる特別な備品であった。直接的な応援団文化と軍隊文化の繋がり証左としては、たとえば東京農業大学全学応援団では、旧陸軍近衛師団騎兵連隊から下付された槍柄を団旗の旗竿として利用していたり、また複数の応援団で旗手隊を「親衛隊」（国家元首を護衛する部隊）と呼称していること、また応援

歌の中には軍歌の替え歌が存在していたことなど、そこには直接的で深い関係性が多数確認でき興味深いところである。あわせて、これらの多くが第二次世界大戦後、復員してきた学生により復興された組織であることもあって、軍隊的思考と密接に関係した応援団文化が生まれ、受け継がれたことはむしろ自然なことなのかもしれないと思われる。

また、戦前から、車京六大学野球が開催されている明治神宮野球場の奉獻式に摂政宮（後の昭和天皇）が臨席し、優勝校に摂政杯が授与されたことなどは、応援団が内包されるスポーツ空間そのものが直接的に皇室という、梅森直之が“非宗教的宗教”と表現する「国体」思想の下に位置していたことを鑑みると、野球や応援団活動とは、この思想下で花開き、またそれを支えていったことになりは興味深いところともなろう。つまり、応援団の構成要素と背景には、近代日本が歩んできた時代の記憶とその残滓が確認できるといえるのである。

ところで、応援団旗は宗教文脈における神の加護の下、その神聖性を高め、独自の世界観を強化している場合もある。たとえば立命館大学応援団では毎年正月に、京都市内の平安神宮において団旗のお祓いを受け神の加護を願うことや、上智大学応援団では応援団旗を新調する際に、団旗と団全体へのキリスト教の神の加護を願い、大学内の聖堂でミサが挙行されている。つまり、ミサを経た新団旗は神の加護が約束され、団旗はその神性に寄り添い存在することになる。このように団旗とは世俗的な集団である応援団の象徴のみならず、諸種宗教など宗教的な文脈と結びつきながら、その象徴的位置を強化してきたのである。

ところで、このようなら応援空間での象徴性・儀礼性を語る例は枚挙に暇がない。たとえば彼らにとり「リーダー台」とは、「バトンの下級生は、リーダー台のぞうきんがけ。この“神聖なる台”の前では、クツも靴下も脱ぎ、「失礼します」と一礼してから「乗らせていただく」のである。この他にも多くの応援備品に神聖性が付与され、これらにより構成される空間はまさに象徴的・儀礼的な空間として理解されることになる。すなわち応援空間とは、多くの神聖性に溢れた「儀礼空間」といえるのである。

4. 応援団とその理想の身体

では応援空間という儀礼空間を維持・安定させるために構成員たちはどのような役割を求められるだろうか。そこでは彼らは先人たちの「魂」を象徴的に継承し、伝統的な行動様式や所作などを踏襲することになる。このいわば儀礼の執行者として、それを支える身体の獲得が求められることになるといえる。そのため彼らは独自の鍛錬法によって体力、声量、声質、言語、所作、応援技法（六大学ではテクと呼称する）の習得の徹底などが図られ、初めて応援団の構成員たる身体を獲得するプロセスを有している。また学ランや学生帽、団バッジ、腕章、団旗、太鼓、リーダー台など服装や備品によってその空間や身体が強化され、この空間を継続的に支えることが可能となるといえよう。

E・ゴッフマン（カナダの社会学者）が示すように、身体の動きや身体的外観は重要なコミュニケーション・ツールとして機能していることになる。つまり、応援団の構成員たちは独自の言語、所作、動きや外観を具有することでその社会的属性を明らかにし、自身を外部から隔離し内部の凝集性を高めていくことになる。集団における凝集性の多寡が構成員の同質性形成に大きく影響することは中根千枝も指摘しているが、彼らは受け継がれる独特な実践を通し

て、伝統という同質性を手に入れる。そこではローカリティが生成され、領域性に基づく新たな「個」人が生まれ、社会化され生活様式が構築されていくことになるのである。

ところで、スポーツ科学の立場から、応援団の身体鍛錬は効率的ではない旨指摘されることがある。たとえば、こおろぎ、鉛筆とび、だっこ、だきつき、おとし、電気いす、アヒル、うさぎ跳びなど「現在の科学的合理的訓練とはほど遠い軍隊式、原始的鍛錬のあけくれであった」と評されるように、実際にトレーニング科学に基づいたとはいえない、鍛錬法を受け継ぎ身体を鍛えるものが多い。たとえば「朝九時から十二時まで山道で兎跳びをやらされたときの苦しかとといったらないです。遅れると後ろから蹴飛ばされる」のような鍛錬が長く実践されてきた。しかし、この一見「非合理的な営み」には、伝統的集団の維持・強化のための「必然性と必要性」が存在していたことも指摘したい。たとえば新人団員たちは日々過酷な鍛錬を課され、自身の限界を超えることを求められるが、それらはいわば通過儀礼的行為とも指摘できるのではなかろうか。新人生たちは限界を超えて自身の価値観を放棄させられるが、そののちに、「新たな身体」を獲得し、この世界の構成員になることが叶うことになるのである。

応援団にはどうしても様式美を求めるという本質的な欲求があるということ・・・体一個で様式美を追求するのだから、どうしたって、厳しいトレーニングが必要となる。そのトレーニングも、主役の運動部以上に激しい、過酷すぎるほどのトレーニングが課せられる。人間、自分からそんなトレーニングに挑戦するわけがないから、ここで“シゴキ”という応援団の永遠の命題が出てくるわけ、などの自己評価と理解は彼らなりの自身の営みに対する“合理的”な理解のありようを物語るものと指摘できよう。

5. 鍛錬への視座とその地平（ある観点をとったときに視野に入れることのできる範囲）

たとえば彼らは発声（歌）練習に際し、咽喉が潰れるまで何度も声だしを繰り返すことを要求される。平素の練習例では「あの長い「都の西北」を一番から三番までを「もう一回」「もう一丁」とハッパをかけられる猛訓練には、腕も上がらなくなり、声はかすれ、目も見えなくなる」。そして、別例では「明治大学の場合は……校歌・応援歌指導というのが待っている。もちろんナミの歌い方では許さない。顔をくずして歌う。つまり顔いっぱい、声いっぱい歌わなければ、応援団の歌い方ではないのだ。ここでまた出来ない一年生は、二年生の鉄拳を食らう」、また「一年生が絶対やらねばならない事は「六旗の下に」の前に、一度、声をつぶして「六旗」に備えることだ。一か月はぜんぜん声が出ない。時には声が治らないままでステージに立つことさえある」などの例がある。

このように彼らは通常では理解しがたい“死練”を課されるわけであるが、その結果として“応援団らしい”形容される太く遠くまで届く声を手に入れることにもなり、彼らはこれら経験を経て初めて、“リーダーの声”を手に入れることが可能になるともいえるのである。

また、たとえば応援団特有の応援技術のひとつ「拍子」の練習を行う場合、明治大学応援団では「金属音が出せるまで」という目標に向かって切磋琢磨することになった。「金属音」と称される理想の音を求めて掌に血豆を作り、それを何度も潰しながら、自身の限界などを越えたところで、拍手の完成を求められることになる。その結果、不思議と「金属音」と呼ばれる高く澄んで遠くまで響き渡る声が出せるようになっていく。「明治のYさんは・・・、拍手の中に本当に自分が没入し、学生の手を全部自分の身体を通して動かしていた」のように、これ

らの、“死練”は時に我々の常識枠を超えた特別な技術や感覚を生み出すことになるのである。

このように自身の身体のあるりようなど度外視された訓練に身を投ずることは、自身の身体を「捨てること」を意味するが、またそれは同時に新たな応援団員としての身体を「手にいれること」をも意味するのである。

6. 応援団という空間への文化化・社会化

「四年生は神様であり、三年は天皇で、一年生へのすべての指示は二年生から出された。一年生と先輩のコミュニケーションは二年生に限られ、三年生以上とは挨拶以外殆ど言葉を交わした記憶がない」「幹部といえば雲の上の人、応援団の権現サマ」「四年、三年雲の上、二年序の口半人前、まして一年ゴミにされ」（車京農業大学「惜別の歌」）とあるが、確かに「四年、三年生は天上人、口もきけないお方々、二年生といえば直接洗礼をいただく相手」「先輩団員の靴の汚れを見つけると、部屋にいる限りの下級生団員が足元に飛びつき、先を争ってごしごしごし……。下級生は虫ケラだ。たった一年違っても虫ケラだ」などのように、応援団には独特の階級制度ともいうべき意識が存在していた。上記言説に従えば、新人部員は「奴隷、ゴミ・虫ケラ」と表現され人間ではない存在、もしくは人間であっても、すべての権利を有さない（人間以下の）存在としてその最下層に位置付けられる。四月に“奴隷、ゴミ・虫ケラ”として加入した新人が、自身の精神や体力の限界を強く否定される状況を経験し、夏合宿という通過儀礼のひとつのクライマックスを経る頃、新たな精神と身体の獲得が認められ「正団員」と認められる。これらの時間と空間が応援団の正式な構成員を醸成するわけである。

一方で、階級制度から見れば最下層に位置していることに変わりはなく、あくまで先述の身分制度に包含され続けることになることも確認しておく。こう考えると応援団の鍛錬とは単なる厳しいシゴキというだけではなく、集団維持の機能のひとつともいえるのではないだろうか。

彼らは単に階級社会的タテ関係を、前時代的なやり方で墨守しているのではない。それは、応援団という空間の維持・再生産にとって必要な文化化・社会化の過程であり、ひとつの文化継承の在り方ともいえるのである。そのように考えると、合理性とは西洋のそれに一元化されるべき概念ではないのかもしれないともいえる。西欧の見方からすれば、合理的でないが当事者たちには“理に適うこと”も存在することになるのである。

7. 集合的記憶を紡ぐ空間

先述のように新人部員は幹部代（四年生）と直接話をするができない仕組み（概念）が存在していた。いや正確に述べれば、彼らの合理性に基づき人間以下の一年生は、神の領域にいる者たちの言葉が「聞こえてはいけない」といった方が正しいかもしれない。そのため、幹部の指示は「物理的」には新人部員に届いていたとしても、四年生から三年生、二年生そして一年生と階級に応じて、徐々に伝聞されることになったのである。つまり幹部代と一年生は「別の世界」に存在していたともいえよう。さきほど、「奴隷・ゴミ・虫ケラ」と表現されていたように、一年生とは応援団という空間の内部に存在しながら、実はいまだに「外部」との

端境、もしくはその周辺に位置され「他者性」を帯びた存在として、共同体と距離＝差異を保持した存在ともいえるのである。

そこには軍旗の例と同様に。軍隊の階級意識の残滓が併存していた可能性も十分あるだろう。たとえば、第二次世界大戦後に復活した早稲田大学応援部OBのS氏は「訓練は厳しかったですね。ビンタなんか軍隊そのもので練習が終わって帰るときには、電車で吊革が持てないほどでした。“キサマらの……”というんですからね。海軍とか陸軍から復員してきたものばかりで、すごく気合が入っていました」と当時のありようを語っている。また「彼らの親玉は軍隊帰りの暴力的な男で、戦前型の応援団を目指していた」というように、戦前や、戦後すぐの応援団を取り巻く環境には、軍隊意識が強く影響し、存在していたことは間違いないことであろう。

一方で、それだけではなく、これら階級制度の背景には先程来述べているように儀礼的世界を保障するための力学が確認できるのである。たしかに応援団空間は「四年生は神様だが、一年生は奴隷。ピラミッドの頂点を目指して這い上がっていくのが下級生だ」のように厳格な秩序が形成されている。その中でも幹部代はその頂点にして大きな価値を付与された存在であることは先述した通りである。

大沢真幸は中世ヨーロッパの王の身体に「集権的身体」とその権力構造の存在を指摘しているが、彼によれば王の身体によって王国は統合が可能となり機能するとされる。つまり、王の身体とはいわゆる生ける身体である「自然的身体」のみならず、「政治的身体」というもうひとつの象徴的・儀礼的身体として存在していたことにもなる。ここでいう「政治的身体」を詳説すれば、過去の支配者たちが継承してきた霊的な力を継承する「器」としての身体を示しており、この力を満たした器としての身体がすなわちミクロ・コスモスとマクロ・コスモスの紐帯として存在し、王国の安定を図れることになるのである。

ところで、この考えは応援団という空間を考える上で非常に示唆的といえる。たとえば、応援団長とは「団長」という役職を務めるのと同時に、過去からの伝統といういわゆる霊的な力を引き継ぐことになる。それはたとえば歌舞伎役者が名跡を襲名する際に、先代や先々代の名「魂」を受け継ぐ責務を負うことにも似ている。応援団という空間も、中世欧州や歌舞伎の世界に同じく幹部代を中心とした、共時的組織と幹部代を紐帯とした「伝統」という空間の二つの共時歴史的領域のバランスを保つことが求められるからである。そのように考えると「幹部になると職名で呼び、呼ばれる。それは俗人ではなく役職を担う、機能するという事だ」という組織の在り方も理解しやすく、幹部になった瞬間に彼らは個々人を離れて、応援団の組織や歴史の一部に置かれることになるのである。そして、応援団活動を終えた幹部たちは“ただの人”に戻るのである」と評されるように、器の役目を終えて個人を取り戻していく様も言い得て妙である。

その一方で二律背反するようだが、彼らの世界観においては、現役学生のみで維持する応援団（伝統校の運動部も）という空間は存在しないことにもなる。OB・OGたちも実は空間の一構成要素として存在し、位置づけられることになるのである。またそれは存命のOB・OGに限ったことではない。すでにこの世を去った先人たちまでも含み、「伝統を継承する」いや「伝統を生きる」集団が受けつがれていくシステムの継続が求められるのである。つまり、応援団という空間は「過去」という時空間をも「共時的」に包含してはじめて存在することに

なる。したがって一方で、現役学生たちは「伝統と現在」の調整役として期待される存在といえよう。小松和彦は「たましい」をひとつの記憶装置と位置付けているが、彼の言では、「たましい」を護る存命の他者が意識し受継ごうとしている間は、過去の人々の存在はこの世に残ると指摘する。したがって「記憶」の限界とは「たましい」の限界となる。裏を返せば「たましい」を護るということに、すなわち過去の人々の存在や足跡をこの世にとどめ続けることになるのである。運動部や応援団などでしばしば“魂の継承”を指し示す言葉が登場するが、これは集団としての記憶をとどめ、それを継承していこうとすることをさしているといえるだろう。つまり、彼らはその集団に関係したすべての構成員の与するいわば「想像共同体」を創出し、その集団の維持に必要なリアリティを生みだし、維持し続けることがその重要な責務となるのである。ところでM・アルバックスの指摘を援用し、彼らのいう伝統を集団の集合的記憶と仮定する場合、積み重ねられてきた記憶を構成員個々人の記憶によって保持・生起するだけでは不十分な営みとなる。個人の記憶と他者の記憶に多くの接点を設け、想起される記憶が共通の基礎の上に築かれることが、必須の営みとなるのである。したがって彼らは、共同作業の場として応援団空間を用意し、過去から受け継がれる行動様式や鍛錬の在り様を保持し続けるのである。これにより初めて伝統的な空間は更新され続けることになるのである。

8. 黒子のアイデンティティ

ところで、団員たちが没個人・没個性を求められる理由を今ひとつ付言しておく。それは彼らが応援という空間では常に主役ではなく「黒子」して存在することを求められるからである。応援団は昔から「縁の下の方持ち」、歌舞伎でいえば「黒子」であり、「裏方」なのである。その精神は、“マシンオイルたれ（縁の下の方持ちであれ）”という明治大学の応援団の理念、精神を表す言葉にも表れている。たとえば「応援団には他の運動部のように目に見える成果はひとつもない。・・・一秒の何分の一かでも早く走れば新記録になり、球を打ったり蹴ったりすれば加点して勝利につながるという事は、応援団には望めない。いくら汗水垂らして応援しても、「今日は応援のおかげで勝たせてもらった。ありがとうということにはならない」というように、試合に参加して実際にプレーすることが叶わない彼らにとって、努力や自己研鑽が競技結果に直結するとはいえない状況にある。勝負事には当然勝利もあれば敗戦も存在する。彼らは常にその場面に立ち会いながらも、いつも役割は「黒子」であり勝負事の外側にいなければならないのである。そのために彼らは没個人が求められ活動に誰よりも熱心に参加しながらも、そこに主体性を見出してはならないし、見出せないのである、ところで、その一方でこのように「黒子」的位置にいながら、いや、そうだからこそ実は、勝敗と直結する特別な存在になり得る可能性を秘めていることを彼らが確信し、それこそが応援団活動のアイデンティティの核心である可能性を指摘したい。以下にその理由を詳説する。

9. 科学知の外側に位置する世界観と求められる成果

たとえば、神宮球場で実施される六大学野球において当該校野球部が敗戦を喫した場合、応援団のリーダーたちは下級生に敗戦の罰として球場外周を走らせることがよくあったという。

「お前たちの応援が悪くて負けた。応援に気合が入っとらん。これから球場十周！」というのがその理由となる。このエピソードは非合理的な考え方の権化として、応援団の前近代性の象

徴として語り継がれることになった。しかし実は、ここには我々の求める合理性とは異なる世界観と、その世界観に基づく彼らの“合理性”が存在していた可能性に注目したい。もちろん「応援団の気合がたりない＝野球の敗戦」という図式に、直接的な因果関係は見出せないのは当然のことである。事実として野球部の選手たちは精一杯のプレーを行い、その結果相手校野球部との自力の差や勝負のாயなどによって勝利に到達できなかったのである。もちろん、応援団もこの空間の重要な構成要素のひとつであり、彼らのパフォーマンスが大きな存在として影響を与えており、彼らの存在が全く勝敗に関係がないとはいえないことは先述した通りである。しかしながら、敗戦の直接因子として彼らのパフォーマンスを引き合いに出すことには少々強引さを感じざるを得ないのは事実であろう。

では団員たちはなぜ責任を負い「罰走」を行わねばならないのか。そこには先述してきたように一般的な科学知の外にあるもうひとつの独自の知の体系が存在しているからと思われる。応援団は自校運動部の敗戦理由を自身のパフォーマンスや「気合い」に求めることを、彼らが自身を単なる機能主義的な約縁集団（共通の目的を拉つ社会集団）ではなく、儀礼空間の維持を担う祭祀集団として位置付けていると考えるならば非常に理解しやすい。つまり彼らが自身の行動やそれを支える空間に神性や儀礼性を見出し、その活動如何によって勝敗が左右されると感じているならば、彼らは勝敗と関係する者としてこの空間に登場していることになる。いやむしろ勝敗を直接左右する大きな存在になるのである。そうなると、敗戦とはすなわち勝利という儀礼行為の結果得なければならなかった「予定調和」を成し遂げられなかったシャーマンとしての自身の力量の問題となってくる。彼らは“応援行動”という儀礼的行為をもってして儀礼空間を構築し、勝利への予定調和を図る役割を担っているとすると位置付けているならば、彼らの一見非合理的な行動とは、実は集団維持に必要な不可欠な必然性を伴う行為と読み換えることが可能となり、それは理解しやすいものかもしれない。

10. 伝統と変容の狭間で

ところで中村敏雄は運動部に継承される練習方法が経験主義的で、伝統的な保守主義や迷信、信仰に守られており、彼らはそこから脱することができないと否定的な指摘をしているが、本章の解釈からいえば、彼らはむしろ自身のアイデンティティを積極的に保護するために“迷信や信仰”に守られた保守的なあり方を選択しているともいえるのである。

しかし、たとえば歴史ある運動部ではいわゆる伝統的なクラブ観の継承をその前提としながらも、運動部の場合は常に秀逸な競技成績を求められることにもなる。「伝統の堅守と競技での勝利」という時として二律背反してしまう二つのスタンスを求められながら、伝統校の運動部は、その下で結果を出さねばならないことになる。したがって、彼らはこの二つを常に天秤にかけながら活動せねばならないことになる。競技ルールやトレーニング科学は常に変化や進化をしながら競技環境を大きく変化され続ける。またそれを見据えながらOB・OGの眼差しともなって迫りくる伝統というプレッシャーを受けながら、彼らは必要に応じてその枠組みを「変容」させていく必要に駆られ競技成績の維持を可能としていくのである。しかしながら、彼らにとり伝統を変容させるということは、すなわち集団のアイデンティティに多大な影響を与える可能性をも包含するために、ひいては集団の否定や崩壊に繋がることにもなりかねない重なる関心事となる。

したがって伝統校運動部においては、新たな選択が伝統を否定するものでないこと、その強化のために必要不可欠な行為であることを“意味づけ”せねばならない。なぜなら、彼らは勝利を得なければならないが、それは「伝統」を護るためのものであり、それ以外は彼らにとり「勝利」とはいえないからである。

ところで、応援団はどうであろうか。彼らが維持する世界は共時的な空間のみならず集団が成立して以来受け継がれる伝統を護る空間として存在していることは指摘した通りであり、運動部と一致するところであろう。しかしながら、彼らは競技成績を求め合理的な判断を求められることはない。時に応援を効果的に行うために応援スタイルの「変化」を選択することはあるが、運動部の置かれた文脈において「変容」を求められることはない。もしも彼らが実際に変容を求められることがあるならば、時代の変化に基づく構成員たちの確保や維持という組織が直面する切実な必要性を求められる場合が多いと思われる。

1 1. まとめ

本章においては大学応援団に注目し、日本の学生スポーツを支えてきた応援活動を通して護られてきた空間とそれを支える身体について考察してきた。彼らは独特の行動様式や所作を堅持するが、それは決して「時代錯誤」的慣習を墨守しているのではない。それらは独自の“合理性”を持って世界観を護る営みであり、さまざまな通過儀礼的で厳しい鍛錬を継承することによって、団員の脱個人が図られ、彼らは応援団空間を支えることが可能な新たな身体を手に入れることになるのである。独自の身体観を手にした彼らは、はじめて集団のアイデンティティを維持・強化する構成員となるのである。このようにして彼らは、過去と現在がつながるひとつの時空間をつねに形成し、更新することを可能にしているのであるといえる。すなわち、応援団とは日本の「近現代の記憶」を収めた、現在進行形のタイムカプセルとして存在しているのである。

以上